

全国各地からの願い・怒り・声が

つながって ひろがって

世直しイッキ!

増やせ
減らせ

反-貧困
全国2008
キャラバン
人間らしい生活と
労働の保障を求めて



10月19日、「反貧困世直しイッキ！大集会 垣根を越えてつながろう!!」が明治公園で開催されました。「2008年の米騒動 一気に!!一揆だ!!」と北九州市をスタートした西ルートと、埼玉県三郷市をスタートした東ルートが、この日ゴール地点で合流。代表の宇都宮健児さん（左）、雨宮処凛さん（右）がむしろに筆を入れ開会宣言です。



「もうやめようよ！ 障害者自立支援法10.31全国大フォーラム—1 からつくろう地域で暮らせる新たな法制を一」。6500人が集ったなかまたちは、デモ行進でも「障害者自立支援法NO！」を示しました。



「STOP! 医療・介護崩壊 増やせ社会保障費（一医師・看護師・介護士を増やして安全・安心の医療、介護を一）」。全国の医療関係者、福祉関係者が集いました。会場の日比谷公会堂に入りきれずに、場外に第二会場を設けました。



今年も、全国各地での青年集会を基礎に、「全国青年大集会2008」が10月5日に明治公園で行われました。長野から駆けつけた青年たちは、先頭に陣取ってアピール。年金者一揆をはじめさまざまな運動が大きくつながって、ひろがっています。

(写真・文 下野祇園)

●特集● “認知症”の人にもやさしいまちをめざす

- 認知症のお年寄りと家族を地域で支える「ご近所応援団」
～「宅老所よりあい」下村恵美子さんに聞く～ 9
- 当事者の視点から学ぶ認知症
—「仕舞」としての呆け— 石橋 典子 17
- 「気づき・寄り添う」施設と、まちづくりに挑戦
高齢者グループホーム「ゆおびか」 23
- 認知症の人と家族への援助をすすめる全国研究集会在奈良で開催 24

トピックス

- 障害者の地域生活を守り支える
グループホーム・ケアホームのあり方 田中 智子 26
- 理不尽なこどもへの資格証明書発行がゼロになる日まで
寺内 順子 34

●連載●

- カナダだより ユニバーサルに生きるバンクーバーの人たち 大河内南穂子 42
- フォーラム 学生無年金障害者裁判勝利の日まで 吉本 哲夫 44
- 【新連載】あさひ希望の里だより
あさひ希望の里の歩みから 小山みどり 46
- 相談室の窓から 老いる 青木 道忠 48
- なべや博士の 社会福祉ひろば
総合社会福祉研究所編『現場がつくる新しい社会福祉』（仮題）鍋谷 州春 50
- スウェーデンから見た日本
「慢性病の国」日本 訓覇 法子 52
- わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」
呆うけない方法—その1— 早川 一光 54
- よりあって おりあって—宅老所よりあい物語—
ただ、年をとっただけなのに…… 下村恵美子 56
- 育つ風景 子育て仲間になる道のり 清水 玲子 58
- 福祉公務労働はいま
ぶれない目、そして連携してこそ 津田 優子 60
- 落合健二のニュース私考
総選挙の争点は世襲・二世議員の追放だ 落合 健二 62
- 映画案内 『夕風の街 桜の国』 吉村 英夫 64
- 女性相談支援の現場から 回復の柱とコンビニ文化 堀 琴美 66
- 海外社会保障事情
曲がり角にたつドイツの公共交通政策 近藤 宏一 68
- 私の研究ノート
何を「予め防ぐ」のか？ 介護予防の手段の側面について 新田 雅子 70
- ホームレスから日本を見れば ネットカフェのオッサンありむら潜 72
- 花咲け！男やもめ 川口モトコ 74
- バリアフリーな社会をめざして
事故が起きないと動かないのか？ 千田 勝夫 75

●表紙の作品●

神門やすこ



●カット●

川本 浩・田上明子

ヒボ

詩人 ひらのりょうこさん

「今日はおちをヒボで くくらはらしまへんのか」
東の病院から 北の病院へ送る車のなか

ぎゅっと目をつぶり つぶやいた

一一回目の転院 がたつく寝台車

「今日はうちがいるさかい ヒボでくくりはしまへんえ」

……

「こおうつと ほいで あんさん どなたさん？」

これが認知症の始まり……

（詩集『YAMAMBA—山姥—お花』収録「ヒボ」より一部抜粋）

一〇年ぶりに詩集を出した。世を捨てた山姥に化身してでも言いたかったこと——それは、この国は私たちを守ってくれるのか。年寄りを、介護をする家族のことを、本気で守ろうとしてくれているのか——という叫び。

三か月ごとに繰り返される転院。三か月は満期であって、二週間から一か月のときもある。「明日の午前、A院へ」。突然呼び出され、告げられる予定。あたふたと支度をし、移動し、おしめやねまきを用意し、山のような手続きに奔走させられる。

京都で生まれ育った九六歳の母の方位磁石は、送り火の「五山」により構成されている。窓から「船形」が見えるのが母が長年暮らしたまちの安心感。それが西から東へ、南へ北へ、転院を繰り返すうち、いつしか母の磁石は狂っていく。転院はやがて地面を歩くことのない、「杖」も「履物」も不要の移動へと変わっていった。ストレッチャーからストレッチャーへ。それは「人」ではなく「荷物」の搬送だった。

私が「国に捨てられた」と感じるのはこれが最初ではない。母は養い親であり、母と私



ひらのりょうこ

1940年生まれ。4歳の時、旧満州より引き揚げ、西陣に育つ。同志社女子大学英文科中退。詩集『五月の風にのって』『ブルー jeans』『箱』『銀の橋』など50冊発刊。近刊『YAMAMBA（山姥）お花』。第10回自由年文学賞受賞。立合詩の朗読集団主宰。

は血のつながらない親子である。

私は旧満州で生まれた。昭和一五年、満州開拓へ向う移民船に顔も知らぬ私の両親も乗っていた。しかし実母は私を生むとすぐに異国の地で病に倒れ、そのあとに嫁いだ母の妹も一人娘を残すと死に、父は現地で徴兵されて、その後、中国奥地で行方不明となる。身よりのない四歳と一歳の幼い姉妹は上海にいた親戚（養父）に託され、はるばる日本へと運ばれることとなった。昭和一九年のことであった。

姉と妹は別々の養い親に引き取られ、私がたどり着いたのは、京都西陣の織屋。自分で子どものなかつた養母は、こうして養父が連れてきた他人の子どもを育てるハメになる。

しかし当時は羽振りのよかつた西陣の旦那衆にはよくある話、養父は次から次へと他所で子どもをつくり、織屋の女将である養母の気苦労は止むことがなかつた。そんななか、養母は「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実ひとつ」……の唄のような幼い子どもを育てることに、どのような思いを抱き、何を託したのか……。親のない子と、夫に裏切られた子のない母の長い年月には、絡み合う紐のようなさまざまな葛藤があつた。しかしそれでも母は私に教育を授け、人々が築き上げてきた文化の大切さを教え、平和と命の尊さを吹き込み、戦争から平和な時代への希望を託した。

私は戦争で孤児になつた。しかしそれはアジアの国々で同じように何百万、何千万という子どもから父母を奪い、帰る家を奪つた戦争でもあつた。人が人を殺してはならない。傷つけてはならない。それを教えてくれたのは母である。

せめて母を縛る「ヒボ」をほどいてやりたい。しかしこんな介護の苦労は、生活を破滅に追いやるような苦労は、到底、我が子にはさせとうない。ならばいっそのこと、自ら我が身を山に捨て、山姥に……。こうして詩集『YAMAMBA—山姥—お花』は生まれた。

（聞き手・根津真澄）

特集

“認知症”の人にも やさしいまちをめざす

最近の研究では、「認知症が進んでも、表情から気持ちを察する脳の仕組みは失われにくい」と言われています。“笑顔の人を見ると自分まで微笑んでしまう”などの神経ネットワークの働きの解明も進み、言葉や記憶によるコミュニケーションが難しくなっても「介護者の笑顔が相手を幸せな気持ちにし、しかめっ面はその逆の効果をもたらす」（東京新聞2008年10月27日）ことも判明しているようです。

こうした研究成果が反映できる福祉介護現場、地域ネットワークの創造を抜きに、認知症高齢者やその家族が人として生きる生活を築くことはできません。

厚生労働省研究班によると、全国の認知症高齢者は、2005年の約205万人から、2035年には2.2倍にあたる約445万人になると推計されます。

当事者の思い、宅老所の実践、認知症サポーター養成運動などを通して“認知症”の人にもやさしいまちづくりをいっしょに考えてみてください。



認知症のお年寄りと家族を 地域で支える「ご近所応援団」

「宅老所よりあい」下村恵美子さんに聞く

聞き手・本誌編集室

にしむら
西村

けんじ
憲次

主人公はお年寄り

よりあいはJR博多から地下鉄で約一〇分、唐人町駅すぐのところにあります。民家に囲まれた、昔の風情を醸し出す築一〇〇年近い建物で、通い、泊まり、そして住むという居宅を中心とした事業を行っています。介護保険として一・二名定員の認知症対応通所介護（デイサービス）と、入居者五名の認知症対応型共同生活介護

（グループホーム）を運営していますが、通所者の緊急時の「泊まり」は自主事業です。

午前九時頃（八時頃のとくもある）にデイサービスがスタートします。利用者はご近所の方が中心で、家族が連れて来られるお年寄りもいます。なかには片道二五分かかる送迎が必要な方もおられます。送迎は職員が車三台で行っています。

お年寄りが順次集まって来られます。経歴はさまざまです。「そ

ろそろ家に帰らないといけない」と何度も言いながら帽子を被る人、歌を歌い得意げにハーモニカを吹く方もいます。なかには歌いながら昔を思い出して涙ぐむ人もいます。ここはある人にとっては唱歌の会であり、同窓会であり、お茶会の場なのです。

職員がすべてお膳立てしてお年寄りを型にはめるのではなく、吹き抜けの開放的な場所で自然体にならせ、お年寄り自らが主人公となつて音頭をとり、仲間づくりをし



お年寄りの送迎で一日がスタート

ている様子がとても印象的でした。

馴染みの家で暮らし続ける

お年寄りと家族の思いが出発点

——よりあいで大切にしてもらえることは何ですか？

下村 お年寄りに「こうしたい」とか「こうしてあげたい」というのは援助する側の主観である場合が多い。高齢者と家族が何を必要とし、どんな困難を抱えておられるのかということから自分たちの支援の方法を導き出していく。ここがブレると間違うと思います。物忘れから不安や困難を抱えるお年寄りは、住み慣れた家で、できれば家族と仲良く暮らしたい、という根源的な願いをもっています。それがこの社会では難しく、とりわけ認知症を抱えると介護す

る家族がまず疲労困憊してしまい、優しくしたいけれど優しくできない。お年寄りは何となくそのことがわかるので落ち込んだり興奮したりします。

一人暮らしだと近所の人を夜な夜な起こして回ったり、ゴミ問題やお金の貸し借りでトラブルを起こします。でも共通に願っていることは、家でできれば家族や近隣の友人たちと仲良く一緒に暮らしたい、ということなのです。そこで私たち専門職と言われる者が間に入り、クッション、潤滑油になれば、何とか地域社会や家での生活を継続でき、「限界」を先送りすることができるのではと思うのです。

福岡でも特養入所待機者は約六〇〇〇人。グループホームは、まだある程度お金をもっていないと

入れません。グループホーム、特養はまだまだ高嶺の花です。家族が限界に来たとき、在宅が厳しくなったとき、頼れるところは精神科しか受け皿がないというのが現実のようです。二〇年前と何ら変わっていません。また介護保険になつてからの緊急時のショートステイは予約がいっぱいで、特に元気で動ける認知症の人は利用できない。よりあいは何とかそれを繕っているようなものです。

介護保険以前はいろいろな事業所が当事者を中心に臨機応援に対応することができました。それらで在宅を支援してきたのです。今は計画以外のことをすると取り締まったり、ケアマネジャーに脅しをかけて余計なサービスを使わないように縛りをかけたり、制度以外のことを躊躇させてしまう。お